

【謙遜な者が幸いです。】

聖書:ピリピ人への手紙2:1-11節/暗唱:ピリピ人への手紙2:10-11節

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev.Jung nam-chul)

2015年前、この地に来られ、いまもともにおられる主イエスキリストの恵みと平和が今年の最後の12月を迎える愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさんの上に注がれますよう切にお祈り申し上げます。

クリスマスの意味? Christmas: Christ(キリスト)+mass(礼拝)

<1. 謙遜と貧しさの象徴, 馬小屋でのイエス様>

2015年前のイエス様の誕生をみるとその方がどれほど謙遜で貧しい心を持っておられたのかが分かります。

イエス様は華麗なエルサレムではなく素朴なベツレヘムでお生まれになりました。少し考えてみれば、これはとつてもすばらしいことです。神の御子が旅館でもなく、馬や牛が休むところ、しかも動物らの餌(えさ)の桶(おけ)でお生まれになったのでしょうか。小さいころ、私は神の御子が家もなく、そんなみずぼらしいところで生まれたという事が信じられませんでした。これは偶然とか過ちではありません。神様の意図のもとでそうなされたのです。どうやって神様であられる方が、救い主であるメシヤがそんな場所を選んで、お生まれになったのでしょうか。イエス様の生涯を考えると胸が裂かれるように震えます。イエス様は“狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません。”と言われました。イエス様は泊まるどころすらく、時には山の上で野宿(のじゅく)された方であったことを覚えると慰めになると信じます。

それだけではなくイエス様が生まれたことを歓迎した人々もほとんどいませんでした。後になって東方の博士たちがイエス様に礼拝しに来ましたが、イエス様が誕生された直後は羊飼いの中でも一番身分の低い夜羊を飼う牧者たちからの歓迎が全部でした。羊を守っていた羊飼いたちに囲まれたイエス様。そのイエス様を黙想すると涙がでながらも、不思議に気持ちが楽になります。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみさん!イエス様のこの馬小屋でお生まれになった事は何の意味があるのでしょうか。馬小屋を経験した人々はどんな環境や境遇に置かれてもうらんだり、つぶやきません。イエス様は馬小屋で生まれました。だからこそ、その後、置かれたどんな不便な環境や状況も耐える事ができたのではないのでしょうか。

裕福に住んでいた人がいきなり貧しく生きるのはとつてもつらいことでしょう。権力を握っていた人がそれを奪われるとつてもなげなく耐え難いと思います。しかし、イエス様は一番低い、みずぼらしいところから始まったため、貧しさも、飢えもそんなに大きい問題にならなかったかも知れません。もしかするとつぶやいたり、うらんだりすることは自ら、自分がある程度の位置に上げたからかも知れません。

<2. 謙遜に来られたイエス様>

この地に来られたイエス様、その方の生き方のもとは何だったと思いますか。それは謙遜でした。今日の本文 6-8節で、“キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑し、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。”イエス様は神様なのに神様のあり方を捨てることをおしまず、むしろ自分を無にして人間と同じようになり、卑しくなられました。そして、死にまで従い、実に十字架の死にまで従われました。イエス様は人間ではなく神様でした。なのに、神様が創造された罪人を救うために罪人と同じような人間になられました。それもこの地の一番低い所に来られたのです。そして罪人と同じように十字架の上で我々の罪の代価として死なれました。

この本文の一番大切な単語があればそれは“卑し”という単語だと思います。結局神様の本体だったイエス様が自ら自分を卑し、一番低い者になられたのです。イエス様の人生は一番低い方向へと向かわれました。そのイエス様がこのように言われました。“人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。”(マタイの福音書20:28)

先週ヨハネの福音書13章十字架にかかる前日、イエス様は御自分が座るべき席に弟子たちを座らせ、むしろ腰をまげ、弟子たちの足を洗われました。そして、そのイエス様は我々のために惜しみなく命まで捨てました。すべてを無にしたのです。御自分を卑し、神の本体を放棄して、我々に仕えるために来られたイエス様! この地に来られたイエス様の人生は謙遜そのものであり、仕える生涯でした。イエス様がこの地に来られ、表して下さった核心価値(core Value)は謙遜と仕えるしもべでした。

若いころ異端にはまっていたアウグスティヌスは母の祈りによって悔い改め、中世の偉大な神学者になりますが、彼の残りの生涯は誰よりもイエス様に似ていくために頑張っていた生涯でした。ある日、弟子たちが彼に問いました。“先生、クリスチャンが持つべき最高の姿勢は何でしょうか。”アウグスティヌスはこのように答えます。“一番目、謙遜である。”“すると、二番目は何でしょうか。”再び弟子たちが問うと、アウグスティヌスは“謙遜である”、“すると三つ目は何でしょうか。”

“三つ目も謙遜である”と答えたそうです。弟子たちが再び質問します。“先生、そして、謙遜の反対は何でしょうか。”するとアウグスティヌスは“それは高慢である”、すると弟子たちは、“先生、最後に高慢とは何でしょうか。”アウグスティヌスは“自分が謙遜だと思うことこそが高慢である”と答えたそうです。自分が謙遜だと思う瞬間その人はすでに謙遜を失ってしまったということです。

サタンが始めての人間であるアダムを誘惑するとき、人生の方向をどこに向けさせますか? サタンはアダムにおまえはかみのようになると言いました。もっと高く! 神のように高く! もっと高く! と高慢をそそのかします。このようなやり方こそこんにち、この世が

我々を誘惑する方法ではありませんか。ところが、この地に来られた神様であるイエス様はほかのやり方を表してください。低くなりなさい!

もっと低くなりなさい!“謙遜になりなさい。仕えなさい!”これが神様であられるイエス様の誕生から十字架の死に至るまで我々に表し、教えてください。真のクリスチャンのあり方ではないでしょうか。

*【謙遜(humility): Humilitas(ラテン語)<Humus(‘地’を意味)

<3. 高く上げられたイエス様>

しかし、自分を低くされたイエス・キリストを神様はそこで終わらせません。本文の9-11節“それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。”

神様はイエス様をどうされましたか?

神様と人間のために自分を低くしたら神様はイエスキリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。そして、すべての万物がひざをかがめ、すべての口が“イエス・キリストは主である”と告白するようにされました。神様は一番低くされたイエス様を一番高く上げました。反対に一番高慢で高く上がっていたサタンを地獄にまで低くさせ裁くように決めました。神様は自分を大きいものだと思う者は用いられません。用いないだけでなく、むしろ退けられると言われました。

“なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。”(ルカの福音書14:11)

祈りの人ジョージミュラー先生が設立した孤児院の園長フレド・バーガーという方は一生生涯主に仕えた後、次のような遺言を残しました。“若い兄弟たちに伝えてください。彼らが小さすぎて用いられないのではなく、大きすぎて用いられないのだと。”

神様はイエス様のように自ら謙遜になり、仕える人を決して見逃さないで、イエス・キリストを高く上げたように彼らも高く上げてくださると信じます。かりに、この世でなければ、あの永遠の天国でも彼を尊く上げてくださると信じます。

マタイの福音書18:4節です。“だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。”

<4. クリスマスに我々のやるべきこと:もっと低くなり、もっと謙遜になり、もっと仕える者になること>

謙遜に、低くなられてこの地に来られたクリスマス!、つねに我々の体質となっている罪人の本性に求めているこのイエス様の提案はそんなに魅力的でも、挑戦的でもないかも知れません。しかし、この世を逆流してイエス様のように低くされた人生をおくろうとする決断こそクリスマスを迎える我々クリスチャンが戻るべき、そして抱くべき信仰の精神ではないでしょうか?

卑しくされたイエス様と仕える姿がもっと輝いているのはイエス様は死にまで従われたからです。もちろん、今日我々が主のために死ぬと告白したからとはいえ、主のために死ぬとか、殉教されることはめったにないかも知れません。しかし、死ぬまで従うという決心がある人のみがイエス様の十字架のところまでついて行けることを覚えましょう。そういうわけで、使徒パウロは主の御前でこのように告白したのです。第一コリント15:31“兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。”

イエス様は我々の心がここまで低くされることを望んでおられます。もっと卑しくなりましょう。これがまさにクリスマスの意味であり、馬小屋で生まれた主の目的ではないでしょうか。イエス様は馬小屋で生まれてお家もなく、転々と渡り歩きました。そして、33歳に我々の罪を赦し、救うために十字架の上で永遠のいけにえとして死なれたイエス様、その方が我々の主です。そして、イエス様はインマヌエルの神としていまも生きておられ我々とともにおられます。今日だれがイエス様をお迎えできるのでしょうか。答えは簡単です。イエス様が来られたところが馬小屋だったので、心が馬小屋のような人にイエス様が訪れると信じます。

“心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。”(マタイの福音書5:3)

“あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。”

(ピリピ人への手紙2:5)

イエス様とともにいることこれがまさにクリスマスです。馬小屋に来られたイエス様が我々の心を貧しくし、謙遜にさせてくださって、我々の挫折と絶望が、まさしく祝福のサイン弾であることを教えてください。おられるのです。

イエス様の謙遜に見習って神様に栄光を返す真の成熟したクリスチャンになりましょう。祝福の主日の朝、我々とともにおられるインマヌエルの主の御前でイエス様の似姿(にすがた)に変えられ、いままでよりもっと自分を卑しくし、もっと仕える者になることによって、神様の御手に高く上げられさらに用いられるみなさんとなりますよう主イエス・キリストの御名によって祝福します。アーメン!

最後にプラベルという方の詩を読んで終わりたいと思います。

“神が一人の魂を満たそうとするとき、まずそれを空(から)にします。神が一人の魂を豊かにするとき、まずそれを貧しくさせます。神が一人の魂を高く上げよるとき、まず自分の足りなさやむなしさを感じさせます。”

祈り) 父なる神様、馬小屋に来られたイエス様を賛美します。複雑でざわめいていた私の心、かたくなな私にイエス様は手を伸ばしてくださっています。私を治めて下さい。癒してください。主のみで満たしてください。

イエス様のようにもっと低くなって、もっと謙遜になって、もっと主の愛で仕える者とさせてください。

主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン!